

# NEXT HIROMIRA PROJECT



広島修道大学





## ひろみら イノベーションスタジオ

地域がそれぞれの特徴を生かした自律的で持続的な社会を創生するために、大学が地域課題を学問的・実践的に紐解き、その解決の方途を、当事者意識を持つ多様な関係者が集まって議論をし、共に解決への行動を起こす場「ひろみらイノベーションスタジオ」を支援します。また、各スタジオが講演とワークショップからなるレクチャーを開催します。

## 広島 都心デザイン 推進会議 Urban Design Meeting Hiroshima

活動期間 ▶▶▶2019.05.20 – 2020.03.31

### メンバー

- |   |                                  |
|---|----------------------------------|
| ▶ <ディレクター><br>木原 一郎<br>(広島修道大学国際コミュニティ学部 准教授) | ▶ 坂本 信哉<br>(一般社団法人広島県タクシー協会)     |
| ▶ <課題提供者><br>山中 佑太<br>(一般社団法人地域価値共創センター)      | ▶ 松尾 雄三<br>(広島市都市整備局都市機能調整部)     |
| ▶ 三浦 浩之<br>(広島修道大学国際コミュニティ学部 教授)              | ▶ 永瀬 道孝<br>(広島市都市整備局都市機能調整部)     |
| ▶ 宋 俊煥<br>(山口大学大学院創成科学研究科)                    | ▶ 河井 雅奈子<br>(広島市都市整備局都市機能調整部)    |
| ▶ 若狭 利康<br>(広島市中央部商店街振興組合連合会)                 | ▶ 黒瀬 享宏<br>(広島市都市整備局都市機能調整部)     |
| ▶ 石丸 良道<br>(広島市中央部商店街振興組合連合会)                 | ▶ 中村 聡<br>(広島市都市整備局都市機能調整部)      |
| ▶ 渡部 宏昭<br>(NTT都市開発ビルサービス株式会社)                | ▶ 檀上 隆也<br>(広島市都市整備局都市機能調整部)     |
| ▶ 陰山 洋輝<br>(株式会社広島バスセンター)                     | ▶ 桜木 司<br>(広島市経済観光局観光政策部)        |
| ▶ 武内 久士<br>(株式会社広島バスセンター)                     | ▶ 豊田 実希<br>(広島市都市整備局都市計画課)       |
| ▶ 浅野 晃平<br>(株式会社広島銀行)                         | ▶ 金藤 淳仁<br>(広島市道路交通局自転車都市づくり推進課) |
| ▶ 作田 巖亮<br>(株式会社広島銀行)                         | ▶ 岡田 浩二<br>(広島市道路交通局自転車都市づくり推進課) |
| ▶ 森重 勉<br>(株式会社そごう・西武)                        | ▶ 吉野 英城<br>(広島市道路交通局自転車都市づくり推進課) |
| ▶ 伊勢川 規子<br>(株式会社パルコ広島店)                      | ▶ 原田 康太<br>(広島市道路交通局自転車都市づくり推進課) |
| ▶ 土肥 一平<br>(株式会社東急ハンズ広島店)                     | ▶ 長谷山 弘志<br>(一般社団法人地域価値共創センター)   |
| ▶ 中山 哲也<br>(独立行政法人都市再生機構)                     | ▶ 田坂 逸朗<br>(一般社団法人地域価値共創センター)    |
| ▶ 新井 健人<br>(独立行政法人都市再生機構)                     | ▶ 浅野 拓馬<br>(一般社団法人地域価値共創センター)    |
|   | ▶ 尾形 愛実<br>(一般社団法人地域価値共創センター)    |

### 事業の概要・目的

広島都心部では広島駅周辺でエリアマネジメント団体がいくつか立ち上がり、2017年にはじまった紙屋町・八丁堀地区でのエリアマネジメント勉強会、2018年のエリアマネジメントシンポジウムを契機に紙屋町・八丁堀地区でもエリアマネジメント団体設立に向けた動きが加速しています。

また広島都心部は内閣府により都市再生緊急整備地域に指定され、その方針文章の中にもエリアマネジメントの推進がうたわれており、勉強や研究だけでなく実践が求められています。

現時点でスタジオ参加メンバーはエリアマネジメントを実践することの必要性について理解しているものの、どのように進めるのが良いのかプロセスに関しては明確になっておらず、また具体的なアクションの立案も未着手である。プロセスやアクションが不明確であることが、都心部における最大の問題であり、都心部の各種建物が近年建て替えの時期を迎える今の広島においては緊急性も要する課題です。

そこで本事業では、広島都心部（特に紙屋町・八丁堀地区）におけるエリアマネジメント活動のさらなる普及・推進にむけて、エリアマネジメント事業の構築プロセスを検討し、具体的なアクションを通してプロトタイプの新出につなげます。

本スタジオでは、昨年度に実施した「エリマラボひろしま」での成果をベースとしながら、より実践的なエリアマネジメント活動へとステップアップしていくことを想定しています。

対象とする紙屋町・八丁堀地区においては

- ・持続可能なエリアマネジメントのあり方について、社会実験の実施体制づくりやプロセスを研究する
- ・広島にあったプロセスを遂行し、具体的なビジョン作りや社会実験を通じて、エリアマネジメントを推進する
- ・対象とする地区のプロトタイプ(目指す価値=ビジョン、ランドデザイン)を明確にし、実現に向けての方策(アクション)を具体化する。

都市再生緊急整備地域全体においては

- ・エリアマネジメントに関わるマネージャーの育成とプレイヤーの発掘を行う。
- ・エリアマネジメント団体間のネットワークを強化する。

上記の複層的な目的に向かい活動を進め、広島市の市民にとっても、来街者にとっても魅力的な都心部となるように、この先持続できるような都市となっていくことを目指します。

### イノベーションレクチャー

NO.1 ▶ 2020.01.20. ストリートデザインの世界的動向  
講師 三浦 詩乃 氏 (横浜国立大学大学院都市イノベーション研究員助教)

## スタジオの目的

広島都心部は内閣府により都市再生緊急整備地域に指定され、その整備方針文章の中にもエアーマネジメントの推進がうたわれており、勉強や研究だけでなく実践が求められている。

スタジオ参加メンバーはエアーマネジメントを実践することの必要性について理解しているものの、どのように進めるのが良いのかプロセスに関しては模索中であった。また具体的なアクションの立案も未着手である。プロセスやアクションが不明確であることが、都心部における現段階における最大の課題であり、都心部の各種建物が近年建て替えの時期を迎える今の広島においては緊急性も要する課題である。

そこで本スタジオでは、広島都心部：カミハチ（特に紙屋町・八丁堀地区）におけるエアーマネジメント活動のさらなる普及・推進にむけて、エアーマネジメント事業の構築プロセスを検討し、具体的なアクションを通してプロトタイプの新出につなげることを目的とする。

本スタジオでは、昨年度に実施した「エリマネラボひろしま」での成果をベースとしながら、より実践的なエアーマネジメント活動へとステップアップしていくことを想定している。

対象とする紙屋町・八丁堀地区においては持続可能なエアーマネジメントのあり方について、社会実験の実施体制づくりやプロセスの研究、広島に適したプロセスを遂行し、具体的なビジョン作りや社会実験を通じて、エアーマネジメントの推進、対象とする地区のプロトタイプ（目指す価値＝ビジョン、ランドデザイン）を明確にし、実現に向けての方策（アクション）の具体化を目指す。

都市再生緊急整備地域全体においてはまだエアーマネジメント未着手の地区において運営事務局ができるようなマネージャーの育成とプレイヤーの発掘、エアーマネジメント団体間のネットワークを強化することを目指す。

上記の複層的な目的に向かい活動を進め、広島の市民にとっても、来街者にとっても魅力的な都心部となるように、この先持続できるような都市となっていくことを目指す。

想定される活動

- ・ビジョン検討会を実施
- ・ビジョンを基にした社会実験の実施
- ・ビジョン共有のための市民ワークショップの実施
- ・紙屋町・八丁堀地区全体のランドデザインの策定
- ・ビジョンの実現のためのアクション
- ・イノベーションレクチャーの実施

## 広島都心部：カミハチの現状

広島市の中心市街地の一部は平成30年10月に都市再生緊急整備地域に指定された。

その地域整備方針の緊急かつ重点的な市街地の整備の推進に関して必要な事項の中で「まちのルールづくりや施設の管理運営などハード・ソフトの両面に渡り、良好な環境や地域の価値を維持・向上させるための活動を地域が主体的に行うエアーマネジメントの促進」とエアーマネジメントについて明言されている。そのためこの事業を進めていくためには必要な取り組みとなっているため、紙屋町地区・八丁堀地区の両方においてその取り組みのプロセスやエアーマネジ

メント団体の形成に向けての模索を広島市やエアーマネジメントシンポジウムを開催した実行委員会の関係者中心に開始された。

その最初の取り組みとして、エアーマネジメントを実践している地域から有識者を招聘し講演していただくこととなった。名古屋から名古屋工業大学の伊藤先生にお越しいただいてお話しいただいた結果、エアーマネジメントを進める上では概念的にも具体的な計画としてもビジョンが必要でそれを関係者が協働して作っていくプロセスが大事であるという合意に達した。

そこで広島を中心市街地におけるエアーマネジメント団体の形成に向けて、ビジョンづくりの勉強会から始めることになった。

### ビジョン検討期

この勉強会においては、対話によって出てきた内容を言葉だけでなくパースなどに起こしてビジュアルでイメージを共有することを目指して進めることにした。またいくつかのビジョンを足し合わせることで全体のランドデザインが明らかになっていくのではないかと仮定した。またランドデザインが見えてきたら早い段階で一般公開して、ステークホルダーだけでなく一般市民も含めての意見を反映させたビジョンとしてブラッシュアップしていくことを目標にした。

具体的には小グループに分かれたビジョン検討のワークショップを行い、そこでの対話の際に精度を気にすることなく手描きのイラストを用いて検討してもらったり、地図上に記入してもらったり、イメージを共有することを意識してもらった。またそこで共有されたイメージは事務局で持ち帰り、パースや地図上のダイアグラムに整理した。事務局では都市計

画の専門家と建築設計の専門家が対話の中で出てきた要素を整理して、パースや地図を作成し、ビジュアルとしてのビジョンとしていった。今回の勉強会ではそれを用いての振り返りからスタートすることで、前回のビジョン案の合意を得るとともに、詳細の理解のズレを最小限に止めるように務めた。また最初から全体を考えるのではなく、八丁堀交差点や紙屋町基町地区、大手町地区など地区を限定して狭い範囲を対象として対話を進めていった。

一部の地権者、広島市・広島県の職員も参加し、また建設コンサルタント、民間企業、そして途中からは外部からの目線や若年層の意見も加えるため、山口大学大学院創成科学研究科の教員と学生にも参加してもらった。

一般公開を8月と定め、3月から8月まで月2回のペースで対話を重ねていった。

最終的には中心市街地のパースと地図上での短期、中期、長期のビジョン、ランドデザインとしての言葉による紙屋町・八丁堀地区全体のビジョン（コンセプト）をまとめた。

8月には既存のエアーマネジメント団体のうち2団体とともに、パブリックミーティングという形で発表の場を設けて公のものとした。諸事情により一般市民の巻き込みは想定より少ないものとなったが、エアーマネジメント関係者や都市デザイン・都市コンサルタント・街づくり関係者の間では、認知されるようになった。

### アクションプラン検討期

8月のパブリックミーティング後は、これまでに勉強会に参加していなかった民間企業からも参加希望があり、多様性が増した。その後の進め方も参加者全員との対話を通して方針を決定した。その結果、パースと言葉によるビジョンの



年月	2019年3月		4月	5月		6月	
	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	第6回	第7回
概要	伊藤先生とのディスカッション	進め方の共有	八丁堀交差点のビジュアルイメージ検討	八丁堀交差点のビジュアルイメージ達成に向けての検討	都心の歴史レクチャー 紙屋町・基町エリア ビジュアルイメージ 検討	紙屋町・基町エリア ビジュアルイメージ 再検討 社会実験案検討	紙屋町・基町エリア ビジュアルイメージ 再検討 社会実験案振り返り
対象エリア			八丁堀交差点	八丁堀交差点	紙屋町・基町・八丁堀	紙屋町・基町	紙屋町・基町
ビジョン(パース)	○	○	●	○	●	●	●
ビジョン(言葉)		○	○	○	○		○
アクションプラン	○			●			
社会実験	○	○				○	○
	事前準備期			ビジョン検討期			

●メインの内容

ブラッシュアップ、ビジョンをブラッシュアップするための有識者の講演、海外からの声を集めること、そしてビジョンを達成するためのアクションプランを検討することが方針としてまとめられた。

まずアクションプランを検討した結果、実際にビジョンの検討のためにも今回描いたランドデザインが一般市民には受け入れられるのか、または実際に都市空間の更新に資するものなのかを検証するために、社会実験から行う方針になった。その際には実行委員会方式を採用して、この勉強会の中から実行委員会にも参加する人員・組織を募った。

またアクションプランの一つとしてこの勉強会の組織体系の整理、組織の多様性の向上などを目標に掲げ、実際に図式化することで勉強会参加者の理解を深めた。その結果、この勉強会はフラットな情報プラットフォームというような位置づけが現在の広島において必要とされているのではないかと一つの仮説に至った。また実行委員会形式に慣れている人も多いため、社会実験の実行委員会を派生させることに関しては円滑に進行することができた。そのため、この勉強会の今後のあり方はP8の図のようになるのではとの一つの仮説を参加者と共有した。

今後は情報プラットフォームであるとともに、分科会を波及生成して、実践的にビジョンを検証していく組織体系とすることを共有した。

ビジョンをブラッシュアップするための有識者の講演については、広島修道大学のひろみらいノベーションスタジオの助成制度を活用して、NTT都市開発の楠本氏、横浜国立大学の三浦氏をお呼びしてご助言をいただいた。（詳細はレクチャーに記載）また先進事例として姫路に視察に行き多くの示唆を得た。

### 社会実験実践期

アクションプランの中に上がった社会実験を勉強会から派生した実行委員会形式で計画・実施に向けて準備を行った。

3/6～29（3/1-5はプレオープン、3/6をランドオープンとして）の間、紙屋町・八丁堀交差点の中間点に位置する相生通りのスタートラムビル、東急ハンズ前を中心に実施した。

パブリックミーティングで中間報告したビジョンから相生通りを人中心の空間に解放することを掲げた。具体的には相生通りをトランジットモール化し、人々が滞在したくなるパブリックスペースを増やすことである。その実現を目指す上での1歩目として、また都市空間が更新されていく上での、パブリックスペースや店舗のあり方を空間的に検証するために実施した。

### 社会実験：#カミハチキテル -URBAN TRANSIT BAY- 社会実験の概要

今回の社会実験の名前は、紙屋町・八丁堀地区を一体的に表現したカミハチ。そして、そのカミハチに「来てる（もうそこに居る）」し、カミハチって「キテルよね（いい感じだよね）」という意味を含んでいる。

また、空間としての意図を補足するため、URBAN（都市で）TRANSIT（ひとびとが気持ちやアクティビティを切り替える）BAY（バスベイ・トラックベイ・タクシーベイ）を副題とした。

今回の社会実験の目的は、ビジョンに照らし合わせた目的は前述の通りであるが、他にも相生通りがビジネス通りとして位置づいているため、オフィスワーカーや買い物客が集まり、憩うことができる滞留空間を設けることで、来街者の行動特性にどのような変化が生じるかを検証する。そのため

ターゲットをオフィスワーカー中心に設定した。

またこのような社会実験は、多くの都市では行政（国や地方自治体）が予算を充てて実施している。広島で過去に行われた社会実験もほとんどはそのような形で行われてきた。しかし今回の社会実験はエリアマネジメントの一環でもあるため、中心とする財源は民間や自主財源また一般市民からの寄付という形で実施した。特にメインスポンサー（FISE WORLD SERIES Hiroshima 2020）を設定して、80%以上を民間の資金で実施した。地域の人々や企業が自ら、様々な形で資金を確保し、まちを変えるための投資する、地域が主導するまちづくり・エリアマネジメントを広島で根付かせたことも今回の目的とした。

空間としては、他の地方都市と同様、広島もクルマ社会であり、多くの幹線道路が都心を貫いている。しかし、狭い歩道に多くのひとが行き交い、ひとにとってあまり快適な場所ではない。広島の都心のひとの動きは紙屋町と八丁堀を結んでいるアーケード街・本通りに集中している。一見にぎわっているように見えるが、ほとんどのひとが通過するだけで、都心でゆったりと時間を過ごし、楽しめるような空間になっていないのが現状である。そこで、もうひとつの東西を貫く幹線道路である、相生通りをひとびとの空間として取り戻すことで、紙屋町・八丁堀エリアのもうひとつの回遊軸とし、都心全体の魅力を高めることができるのではないかと仮説を立てた。また相生通りは、他都市の主要街路と比べて街路樹などの緑も少なく（「紙屋町・八丁堀エリアマネジメント実践勉強会」調べ）、都市の潤いも不足している。

そのような相生通りにおいて、社会実験は性格のことなる3つのエリアを定めて実施した。

【Aエリア】八丁堀バス停（東急ハンズ前）バスベイ+トラッ

クベイ+タクシーベイ

【Bエリア】スタートラム広島敷地内の一部スペース

【Cエリア】リパーク広島基町駐車場の一部スペース

Aエリアは上記の空間にウッドデッキを設え、バス停と滞留空間を分ける部分にコンテナを設置して統一したパブリックスペースの仕様としながら、機能を分割することができている。

Bエリアはスタートラム広島敷地内の空地に机や椅子などを置き、より滞留しやすい空間とした。

Cエリアは仮設のパブリックスペースを作り出し、その中にさまざまな場を設定することで、この空間を訪れる人の思いによって使い分けができる空間とした。

これら3つの空間の相乗効果を出すことによって起こる変化を記録・分析することにより、広島の都市空間にどのようなパブリックスペースが適しているのか、現在ここを訪れるビジネスパーソンにはどのような機能と空間が必要なのか、今後の広島の都市空間づくりに活かしていく。特にヨーロッパでは30年ほど前から、道路空間をクルマからヒトに取り戻し、歩いて楽しい「ウォークブル」な都市づくりが進んでいる。歩きやすいが過ごしやすいつながり、都心の活力を取り戻す都市が増えている。近年ではニューヨークやメルボルンなど海外の多くの都市がこれに追随し、世界トレンドになりつつある。日本の都市も国土交通省も提唱したこともあり、多くの都市が「ウォークブル」な都市づくりを開始している。広島もこの相生通りを中心に「ウォークブル」な都市へ変わっていきけるように活かしたい。

年月	7月		8月		9月		10月	11月	12月	2020年1月
回	第8回	第9回	第10回	第11回	第12回	第13回	第14回	第15回	第16回	
概要	紙屋町・基町エリア ビジュアルイメージ 再検討 (細分化範囲ごと)	パブリック フォーラムの 発表資料検討	パブリック フォーラム	パブリック フォーラム 振り返り	組織体制検討	アクションプラン と 優先順位の検討	楠本様 講演 ディスカッション	社会実験 検討	社会実験 実行委員会 報告	三浦様 講演 ディスカッション
対象エリア	紙屋町・基町									
ビジョン(ベース)	●	●	○	○			●	○		○
ビジョン(言葉)	○		○	●			●			○
アクションプラン		○	○	○	●	●	○	○	○	○
社会実験		○	○	○	○	○	○	●	●	●
	ビジョン検討期				アクションプラン検討期					

● メインの内容



## 紙屋町・八丁堀エリアマネジメント 実践勉強会の今後

### 成果

紙屋町・八丁堀エリアマネジメント実践勉強会の実践を通して、以下の項目が有効であることが明らかになった。

- ・言葉だけではなくイメージを優先して共有
- ・実践すること
- ・プラットフォームと分科会のスピノフ形式
- ・分科会へ決定権の譲渡

### 考察

#### (1)言葉だけではなくイメージを優先して共有

勉強会の進め方に関して、特にビジョン検討期は、単なる知識を得るだけでなく作業を伴い、そしてその作業も言葉を共有するだけではなく、ビジュアルイメージを作り、それを優先的に共有することを前提として進めた。言葉への曖昧な捉え方ではなく、ビジュアルイメージとしてのパースを用いて参加者の考え方の共有をすることで、多様なバックグラウンドを持つ参加者であったが、それぞれの考えや想像の差異を少なく抑えることができた。と考える。

実際に共有しているイメージを洗練させながら、成果としてこれまで考えてきたことを、これから新しく勉強会に参加される方々や一般市民に向けて伝えていく・発信させる上では言葉が必要になってくる。そのため、今後の勉強会の進め方は言葉によるビジョンのブラッシュアップを行っていく。このビジュアルイメージ→言葉のブラッシュアップの流れは、これまで他の団体が公式なエリアマネジメント 団体を形成していく過程、特に広島での取り組みにおける順序とは異なってい

る。紙屋町・八丁堀地区のように、これまで数々の提案がなされてきた地区で、かつそれらの多くが実現されてこなかった地区においては、実践するための勉強会という意識を醸成するためにも、ビジュアルイメージ→言葉という流れは効果があったと考える。その証左として社会実験を実施して検証すべきであるという言及が早い時期から上がり、考えてきたことの価値に関して、実践を通して効果を検証し、修正する流れを作ることができた。

広島都心部の風潮としてはビジョンは自由に打ち立てて良いものという考えではなく、行政が提示するもの、または財界トップが提示するものという考え方もつ方が少なくない。そのような風潮が広がっているなかでは有効な順序設定であったと考える。

#### (2)実践すること

ビジュアルイメージ→言葉のブラッシュアップの流れに加えて、実践を通して検証していくことは有効である。特にこれまで停滞してきた地区においては、様々な活動をされているものの、進化や変化が薄いものが多いため、実施すること自体が目的化されてしまい、本来の目的が見失われているものも見受けられる。そのような地域でエリアマネジメントを推進することは、経験と知識が多い分、二の足を踏んでしまう傾向にあった。

そこでどこか早い段階で実践することを組み込むことが有効であることが明らかになった。今回は考えたビジョンの検証として、社会実験を実践した。メディアへの取り扱われ方、注目度の高まり、その価値の確認、ビジョンの検証結果を踏まえて、一つの成功体験としても捉えることができ、勉強会の次へのステップへの推進力とすることができた。

#### (3)プラットフォームと分科会のスピノフ形式

アクションプラン検討期において、社会実験の検討がなされる際に分科会方式が取られ、その分科会が社会実験の実行委員会へと変化していった。また勉強会の今後のあり方が検討され、フラットな情報プラットフォームであるべきではないかと提案がなされた。

情報共有のプラットフォームの横の広がり分科会の波及生成の縦の広がりエリアマネジメント団体につながる組織の形成や定着には適しているのではないかと考えられる。団体の包摂性をプラットフォームが高めて、多様性（参加者の属性だけでなく、そこで取り込まれる内容という面）を分科会のテーマ設定が高めていくことができる。一つのコミュニティの持続可能性を高める条件に一致すると考える。この形式も正式なエリアマネジメント団体（都市再生推進法人等）になるまで継続させることに適していると考えられる。

#### (4)分科会へ決定権の譲渡

社会実験を検討する際に、社会実験の分科会ができ、その分科会が社会実験の実行委員会と形を変えた。それに伴い、社会実験における決定権を元の勉強会から実行委員会に譲渡することによって、具体的に詳細な検討をすることができ、分科会で勉強会よりは規模は小さくなっているとはいえ多様な参加者の考えをより迅速にまとめるには有効に働いたと考えられる。

その分科会（実行委員会）は、決定権は譲渡するものの、勉強会において必ず報告をすることを義務としている。それにより勉強会における分科会（実行委員会）の報告は一つの有意義な情報提供となる。実際に実践において得た情報や振り返りは最前線の情報であり、勉強会参加者にとって参

考になるものであった。

これにより、分科会での検討が実践の形になっていく速度が上がることは、勉強会参加者は実践を通して検証していく意識が高まり、また一般市民など外部の方も実践を目の当たりにすることで組織自体や取り組みの意義を少しずつではあるが伝えることができると考える。勉強会も情報プラットフォームの機能を維持していくことができ、実践を通じた情報が増えて情報提供の質も上がると考える。

### 課題

現時点での課題として以下のように考える。

- ・団体のさらなる公式化（体制、予算）
- ・未着手アクションプランの分科会化
  - 言葉によるビジョンブラッシュアップ
  - ランドデザインの策定
  - 海外の声を集める
- ・ビジョン共有のための市民ワークショップの実施
- ・分科会の増加に伴う事務局の負担増への対処
- マネージャーの育成とプレイヤーの発掘

公式団体化に向けては参加者によるエリアマネジメント関連の取り組み紹介を行い、それぞれのできることやこの団体化に向けての目的を共有してから進めていくことも検討中である。

未着手であるアクションプラン、ビジョンのブラッシュアップ・ランドデザインの策定や海外からの声を集めることに関しても分科会として派生させて実践することが円滑にかつ議論の密度もあげながら進行できると推測される。ビジョン共有の市民ワークショップも不十分であったため、意識的に取り組んでいきたい。



## 人間中心の街づくりとは？

今回は、『人中心の都心』等について理解を深めるため、NTT都市開発株式会社代表取締役副社長 チーフデザイナー／NTTアーバンソリューションズ株式会社取締役副社長の楠本正幸氏をお招きし、情報提供及び意見交換を行った。楠本氏は、広島都心部における過去最大の都市再生プロジェクトである、基町クレドの事業推進の中心人物である。

まず、楠本氏から参加者へ向けた情報提供として、「人間中心の街づくりとは？」をテーマに基調講演をいただいた。以下にご講演いただいた内容をまとめる。

### ①今の時代は人間中心。技術が発達すればするほど『人』へ返ってくるという認識が必要

現代は、人間中心の社会を創ることを目的とした「ソサエティ5.0」、誰一人取り残さない世界を目指す「SDGs」に加え、急速にIoTやAIが進歩している。世界中の人が、自分の生活する街を無数の選択肢から選べる時代となっており、世界中の人に選ばれる、他とは違う魅力を持った街づくりが重要であると考えている。そのための街づくりの方向性として、重要なキーワードは以下の3つ。

- 「多様性（いろんな人が集まり街の活気が出ること）」
- 「回遊性（楽しく安心して街を歩けること）」
- 「オンリーワン（自分にとって特別な街であること）」

### ②都市の魅力を実現するためには、都心全体を一体的に考えることが必要

「魅力ある街」となる重要な要素の一つとして「食文化」が挙げられる。食ベログの評価をもとに広島市と他都市を比較すると、広島は京都の1/10である（楠本氏調査）。広島は食文化が話題にもならず、街に回遊の目的になりにくい現

実があるといえる。紙屋町は広島駅から離れており、紙屋町交差点を中心に円を描いたとき、エリア内に飲食街はあまりない。また食の中心（八丁堀）、文化的要素（原爆ドームなど）の中心も広島駅と離れているため、都心部をまとめるのが難しい。だからこそ、一体的に考えないと、都市の魅力を実現するは難しい。

### ③大きな街区を横断でき回遊できることで、エリア全体が劇的に変わる

一般的に100m以上の街区は、人は歩いていて退屈と感じると言われている。広島は、相生通りの北側街区が大きすぎる。県庁やNTTグループの広い敷地が再開発により分割されると、回遊性がさらに増すのではないかと。また、サッカースタジアムができることでより一層北への回遊性が重要になってくる。勉強会において、球場跡地を含めて北への動線を検討することで回遊性が向上されるのではないかと考える。

### ④広島は住みやすい都心・No.1になり得る

広島と同じ人口規模であるコペンハーゲンを例に挙げる。コペンハーゲンは、住みやすい都心・幸せな都市No.1である。街の規模や構造に差はないが、にぎわいが全く違う。広島都心部は、水・緑・公園がある。また、県庁前の広場は素晴らしいオープンスペースになり得る。広島もコペンハーゲンのような街づくりができると確信している。

続いて、基調講演の内容を基に楠本氏と参加者による質疑応答の場を設けた。以下に内容をまとめる。

**質問：「広島都心の経済的な状況を鑑みないと、新しい空間ができたとしても人は訪れにくいのではないかと」**  
エリアの特徴を福岡と比較する。（楠本氏の見立てでは）

福岡は人や店が限られた区間に集中しているのに対し、広島は分散している。同じ分だけお金を使っても街全体が潤うわけではない。広島は水や緑が圧倒的に豊かで、食文化も引けを取らないが、街の構造やビジョン等のスピード感は福岡と比べるとかなり差がある。歩行者ネットワークに魅力を集約させて、いろんな人が共住できるコンパクトな街をつくるのが大切であるとする。

### 質問：紙屋町八丁堀エリアの回遊性を上げるために具体的にどうすればよいか

まずは、交差点の周りに特徴ある境界があることが大事（相生通りの八丁堀付近を歩行者天国するなど）。

また、新しく建設されるサッカースタジアムへの動線として、鯉城通りから広島城を介する動線や、球場跡地の中を通る動線など、複数の動線を整備することが重要。試合がないときのスタジアムの活用方法も検討する必要がある。そしてなにより、行政や市民、商店街、事業者全員が、将来ビジョンを共有することが大切。相生通りの歩道を広げて車道を一車線にするなど、官民連携の動きがあることが重要と考える。

### 質問：駅周辺の再開発が予定されているが、今後、駅周辺と紙屋町八丁堀が共存し、相乗効果を発揮するための留意すべき点はあるか

駅は都市にとって非常に重要であるが、駅周辺だけで計画を行うと広島のアイデンティティはなくなる。広島の都市の個性や文化は、紙屋町・八丁堀にあると考えている。回遊性を実現すれば性格の違う都心を使い分けができると感じる。

たとえば福岡では、福岡駅はJR、天神は西鉄であるが、駅周辺と天神のすみわけがはっきりしているため、それが多様性につながる。

最後に、本レクチャーを以下のようにまとめた。

紙屋町・八丁堀地区のこれからのテーマは「食」「エンターテインメント」「ナイトエコノミー」「スポーツ」をどう活かすかである。都心部にサッカースタジアムをつくれる機会はそうそうない。有効に使われていない土地があることをポジティブにとらえることが大切。

また、「魅力のある街」にするためには、いかに多くの人々が街づくりに関わり、同じ立場で一緒に作る過程が重要とってくる。反対派の中心人物から納得を得られると、心強い味方になる。広島都心街に関わる人たちが自分の立場を超えて一緒に議論する場があることは画期的なことである。理解していない人を積極的に巻き込んで納得するまで話をすること。議論しているばかりではなく、まずは何かをやってみることがとても重要である。

————メンバーの受け取り————

楠本氏のレクチャーを聴き、人々が「都心」に行きたくなる、行けば何らかの“愉しさ”、“心地よさ”があり、“出会い”もある、という期待感、高揚感を持つような装置を都心に持たせることが必要なのだろうと思えた。

そして、都心を訪れた人々がまちなかを回遊することで、予期していなかった発見（愉しさ、心地よさ、出会いなどの）に巡り会い、再訪したいという思いを残し、これを褪せないようにしていく、そのような奥行きや変容を、都心が有している事も大切なのだなと思った。ただ、ここでの装置とは、カタチあるものではなく、人々それぞれでの体験であろう。この体験の質を高く、量も多く内在させ続けていることが、都心の魅力であると気づかされた。

（広島修道大学 国際コミュニティ学部 教授 三浦浩之）



今回は、『世界のストリートデザイン』等について理解を深めるため、横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院助教の三浦佳乃氏をお招きし、情報提供および意見交換を行った。三浦氏は、都市計画を専門とされており、編著として「ストリートデザイン・マネジメント：公共空間を活用する制度・組織・プロセス（2019）」を出版された。

まず、三浦氏から参加者へ向けた情報提供として、「ストリートデザインの世界的動向」をテーマに基調講演をいただいた。以下にご講演いただいた内容をまとめる。

#### ①「リクレイム・ザ・ストリート（ストリートを取り戻せ）」

「リクレイム・ザ・ストリート」はストリートを自分たちの暮らしに取り戻すという意味で使われている言葉である。「道」は経済的発展や利便性向上のために整備されてきた一方で、家や職場、余暇を過ごす場所など暮らしと深い関わりをもつ空間である。それを通行のためだけに使うことは非常にもったいない。以上の背景のもと、暮らしに取り戻す社会実験が各地で行われている。

日本の事例を2つ挙げる。愛知県岡崎市では、“1m軒下を伸ばす”ことで、憩い空間をつくりだした。その結果、普段は人がまったくいないところにコミュニケーションが生まれた。一方、松山市のアーケード商店街では、空き店舗を利用し、道に今後将来どうなしてほしいかなどのアイデアを集める、リビングルームのような空間をつくり出した。自由に移動可能な椅子やテーブル、自由に本を持ち寄れる本棚などを設置し、いろんな仕掛けやコミュニケーションの在り方を詰め込んだ。

日本の空間の使われ方として、昔は外と内の空間をつなぐ

（例えば井戸端、土間など）室内や、街側が家から引き出すような仕掛けがあった。以上の2つの事例は、近代化により失われた家の空間と外の空間をうまく利用した仕掛けがなされている。

#### ②ストリートデザインの世界的動向

世界中に広がっているパークレット。サンフランシスコで始まった流れは世界各地に広がり、日本は新宿区が最初である。新宿区では、荷捌きエリアを歩行空間にしたことで、人の流れをよくするために立ち上がった社会実験である。実施期間中は、地域の申請がないとコミットしないチェーン店が無料配布を行うなど、より魅力的な空間へと変化した。

今までは、経済成長していく中で、街路樹を切り、車空間を広げる街づくりをされてきた。しかしこれからはいかに車、自転車、公共交通、沿道のビジネス、小売店に対してやさしい環境にしていくか。人同士の交流が生まれるようなストリートデザインへと変化している。

ロンドンでは、2020年までにオックスフォード・ストリートのトランジットモール化が進んでいる。整備により不動産価値の上昇や誰もが安心できる空間ができるなど、自分たちに十分な利益があるという共通認識のもと民間と行政と一緒に取り組んでいる。交通管理者が荷捌きの位置設定など、計画が作りやすくなる。

実験をきっかけに街づくりがどうあるべきか、実験の対象を広げる形で絵にしていくと議論も仲間も増えていくと思う。

続いて、基調講演の内容を基に三浦氏と参加者による質疑応答の場を設けた。以下に内容をまとめる。

質問：社会実験に明確な目標は必要なのか。それとも、

様々な面から効果を検証するために目標は立てないほうがいいのか。

パークレットの事例だと、車だけの空間にするのではなく、公園みたいに使ってみたらどうだろうかという思いから始まった。そこから様々な形でデータを取り効果検証を行い、このまちに合うか、経済効果や回遊効果、アクティビティが生まれるかを示すことで地元で納得してもらう。明確な目標が必要なのではないが、プロセスや効果検証が社会実験のカギとなる。

質問：海外の中で、日本でも参考にできる事例はあるか

街の真ん中に広場があるようなドイツやイタリアの街は70年代の歩行者空間がはじまった初期から面的にうまくいっている事例である。一方イギリスは基盤の目状ではないので、交通や街のイベントや座る場所を細かく設計した。そう考えると、イギリスと日本の状況は似ており、現在の研究対象となっている。

質問：街中を歩行者優先の空間をつくることと通過交通はどちらを先に行うべきか。

まずは、10年後どういう街にしたいかということである。基本的に長期のビジョンを作るときは、現状からの予測するのではなく、将来どうしたいかに焦点を当てる。社会実験を実施するときには、一時的に渋滞が起きたとしても長期間実験を続ければ、車のユーザーの行動も変化する。実際に体験してみないとわからない。まずはやってみることが大切。

質問：社会実験には各種関係者との調整など課題がたくさんある。うまくいった事例を紹介いただきたい

新宿大通り約40年間土日のみホコ天をしている。地元はずっと歩行者天国化をビジョンに描いているが、大型店が多

いので荷捌きが多くホコ天が難しい。その妥協策としてパークレットである。小さく始めることで、大きなビジョンがある中で妥協を積み重ねて、路上駐車対策や歩行者の横断距離を短くする。

質問：相生通りの非常に多い通過交通に対して、対応策や解決策はあるか

トロントが相生通りに近いと感じた。このパークレットは車の侵入は許すが公共交通を優先するモデル地域になっている。荷捌きできる街区と進入禁止の街区など、パークレットと交通規制を一緒にやる。まずは交通規制やパークレットを増やす。それに伴い他の街区の使い方も考えられる。通勤通学の時間帯以外の時間の街の質を高めるために何が出来るかを探ることが重要であると考え

最後に、3月の社会実験について、以下のような言葉をいただいで、本レクチャーは終了となった。

イベントと組み合わせであることが面白い部分であり、ただのイベントと思われぬような工夫が必要。3月社会実験は、道路に対する考えを変える大きな分岐点となる。まだ不明瞭な部分があるため他の街と比べると弱いかもかもしれないが、空間的にとても面白そうである。

